

V. パラグアイ帰国後の報告

● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 安藤 理恵

私がこの研修に参加した目的は、まず自分の目で見て、感じることで、新たに違った視点で学ぶ事が出来る何かを見つけることであった。この研修で出会った多くの方々、様々な経緯で、また多くの異なった方法で国際社会に貢献している。「自分にできることが何かある。」と生徒に言うことは簡単であるが、高校生にとって、とりわけ自己肯定感が低く、自分は何も持っていないと感じている生徒たちにとっては、その何かを見つけることは極めて困難であると感じていた。今回の研修では、資格やスキルを持った人々が、特に難しく、際立ったことを現地で実行しているのではなく、日本であれば当たり前のことが当たり前でできていない発展途上国と呼ばれる国で、自己のスキルを利用しながら、地道に小さなことを変化させている姿を確認することができ、自分の生徒達が今後、国際開発を学び、社会に貢献していく際に、どんな方法で貢献していけるのかを見いだすためのきっかけやヒントをもらえたと実感している。

● 市江 文奈

英語教員である私は、日々の授業で子どもたちが世界へ目を向け、地球人として行動できるようになってほしいと思っていた。授業などで留学先や旅先での話をすると、子供たちの目がキラキラ輝く。その輝きを、パラグアイとの出会いを通してより強めてほしい、もっと世界に目を向けて視野の広い人間へと成長してほしい、子供たちと世界をつなげる架け橋となれるような人間になりたいと思い、今回の研修に臨んだ。パラグアイでは、日本の忙しい毎日ではあまり感じることもできない人の温かさや思いやりに触れ、人との出会いに感謝する機会がとても多かった。現地の言葉が十分に話せない私たちに対して、積極的に話しかけてくれたり、とびっきりの笑顔と、ありったけのおもてなしをもらった。この「心の豊かさ」について、自身の経験を共有し、一緒に考えたいと思う。異文化理解を通して、自分の日常生活で大切にすべきものは何かをふりかえり、自己肯定感を高められるような実践ができたかと考えている。

● 児玉 やこ

2年前から国際理解教育に取り組んでおり、今年度1年を担当するにあたり、国際理解教育の3年間のモデルプログラムを創ろうと考えている。そのためには、私自身がまず世界

のことを知らなければならない。自分の目で見て、聞いて、感じたことを生徒に伝え、世界と生徒をつなぎたいという想いをもって参加した。日本から見ると、地球の裏側にあるパラグアイに日系社会が存在することや、日本人が多く活躍していることを知ることができた。ホームステイや現地の子もたちとの触れ合いの中では、人の温かさや穏やかな時の流れを体感した。一方で、バリアフリーではない街、格差の存在、ごみ捨て場の横のスラム街で生活する人々の様子を垣間見て、課題を共に解決するために考えなければならないことを知った。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方へのインタビューを通して、自分たちが創る世界に夢をもつことの大切さや、地球市民として考え行動することの意義について生徒に伝え、頭に世界地図を描き世界を身近に感じられる生徒の育成を目指したい。「見える世界が変わる」と聞いて参加したこの研修で、新しい知識や価値観を得ることができた。SDGsのために自分ができることを生徒と共に考えていきたい。

● 笹ヶ瀬 菜生

私は、世界で起きている事象を自分の目で見て知り、多面的に考えられるようになりたい、自分と関係のない遠い国の誰かではなく、自分と同じようにその国に生きる人がいることを子どもたちに知らせたい、という思いから研修に申し込んだ。パラグアイで実際に見て、話を聞き、思いを伝え合う中で、気付いたり考えたりしたことがたくさんあった。自分のもっていた価値観がぐらっと揺らぐ瞬間を何度も感じた。多様な見方や考え方があることを、どんな人との間でも大切にしていきたいと思った。パラグアイには、日本の文化や言語を守りながら暮らしている人がいる、強い使命感をもって働いている人がいる、いつも自然のことを考えている人々がいる、貧困に苦しむ人がいる、悩みながら学ぶ学生がいる、自由に思いっきり自己表現する子どもたちがいる。一般的にそのような人がいるという認識ではなく、顔の思い浮かぶ一人一人に出会うことができた。私は、学校の子どもたちに出会った人の表情や言葉を伝えたい。そして、交流したり一緒に考えたりすることを通して、世界を身近に感じ、関心をもって考えたり行動したりする力を育てていきたい。

● 清水 歩美

私は、「自分自身が異文化を積極的に経験したい、そしてその経験を自身の言葉で子どもたちに伝えることで、世界に興味を持ってほしい」「世界を知ること、日本のことももっと

好きになってほしい」と思い、本研修に参加した。私自身が研修の参加が決まるまでパラグアイのことを全く知らなかったのと一緒に、何かのきっかけがなければ子どもたちもその国について詳しく知ることはない。パラグアイという1つの国について学ぶことが始まりとなって、「世界にはいろんな国があるんだ」「もっと知ってみたい」と感じるようになってくれたらと思う。これからの授業実践は、その懸け橋になると思う。現地研修では、その目的をいつも感じながら過ごすことができた。現地では、教育格差や貧困問題など実際に目で見ただけで感じるものがあった。また、日系社会に対してイメージが変わったところがあったり、ホームステイを通して日本にはない文化を感じたりして、なんとなく思い描いていた帰国後の授業の展開が少し変化したところもあった。小学校1年生の幼い子ども達ではあるが、五感を使った体験を入れながら異文化に積極的に関わろうとする姿勢を育んでいきたい。

● 田原 浩美

現地研修における私の目的は二つあった。まず、本校の同僚である青年海外協力隊の渡辺さんに依頼した交流を実現させることである。本校で事前に授業を行い、児童一人一人がサン・ミゲル特殊教育センターの子ども達宛に書いた手紙を、センターの子ども達に手渡すことができた。今後は、センターの子ども達から受け取った手紙を本校の児童に渡し、さらにビデオレターを交換したり同じダンスを踊ったりする交流を行っていく。海外の人と知り合うことで、海外に関心をもてるようにしていきたい。もう一つの目的は、児童が五感で感じられる教材を持ち帰ることである。本校の児童は肢体不自由であるが、それぞれ得意な感覚がある。茶葉やスパイス、工芸品や伝統音楽のCDなど、五感に働きかける生の教材を入手してきた。児童が、経験したことのない刺激を感じ、さまざまな感想をもちながらも、いろいろな文化を受け入れられる力を育んでいきたい。

● 村田 義剛

私は、子どもたちに「世界の国々と自分との“心の距離”を縮めてほしい」という思いをもって研修に参加した。私は6年生の子どもたちに「知ることから始める国際理解教育」をテーマに、開発教育を行っている。その中で海外研修経験をおもちの先生方を学校にお招きし、本やインターネットではわからない生の教材を用いて授業をしていただいた。私自身も、子どもに生の声を届けたい・子どもが自ら世界のために一歩踏み出すきっかけを作りたいという思いが強まり、研修に参加させて頂いた。研修に参加し、パラグアイという国の文化・風土・人柄等を肌で感じる事ができた。しかし、それと同時に、自分の「世界」への捉え方の狭さ、また、心の中で価値観・先入観を無意識にもっていたことに気付かされた。「幸せの尺度」「時間の感覚」など、日本とは異なる点が多くあることに気付くことができた経験であった。この自分自身の気付きも踏まえ、パラグアイという国について肯定的に出会ってもらえるような授業を行い、そこからパラグアイの課題や自分たちにできることなどを、子どもたちと考え

ていきたい。

● 油浅 重里

現地研修に対する最も大きな目標は、視野を広げ、自分自身を成長させることであった。現地研修を共にした仲間はもちろん、パラグアイで出会った青年海外協力隊の方、ホームステイ先のご家族のみなさん、訪問先で出会った子どもたちや先生方との交流や、今まで知る機会がなかったことについて学ぶこと、行ったことのない場所を訪れることなどの多くの経験を通して、これまでの自分の視野を広げることができたと感じている。現地ではしかできない貴重な経験をさせて頂いたことで、子どもたちにも実感を込めて語ることができるため、授業実践をする上でも大きな役割を果たすと感じている。また、現地ではしか集めることのできない教材も十分に集めることができ、子どもたちが世界を感じる上で貴重な役割を果たすと考えている。そして、パラグアイの小学校で活動する青年海外協力隊の方とのつながりを通して、パラグアイと日本の子どもたちをつなぎ、子どもたちにとって世界を身近に感じる機会を与えることができたらと思う。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 安藤 理恵

パラグアイは私たちをとっても肯定的に受け入れてくれた。パラグアイで出会った人々、パラグアイの風土や文化も、私たちにはとても親近感のある存在であった。それはなぜか？それはたぶん、パラグアイに根付く日系人の方々が築き上げてきたものに、私たちが自然と取り込まれていったからであろう。我々はもちろん、肯定的に出会おうというつもりで現地へ降りたのだが、パラグアイはもっと大きく私たちを受け入れてくれた。日系人の方々は、パラグアイの人と共生しながら、独自の文化を保っている。単に共存しているのではなく、共に高めあい、助け合って共生している。そして、JICAのODAもまた、パラグアイに寄り添い、パラグアイと共に、パラグアイの発展のために援助している。そういったすべての方々のおかげで、私たちは受け入れられ、肯定的にパラグアイと出会えた。大切なことは、相手国に寄り添った共生であるのだと強く感じた。

● 市江 文奈

初日のブリーフィングで、現地 JICA 職員の竹村さんより、「パラグアイにきた人は、絶対パラグアイを好きになる。だが、どこが好きかと問われると、うまく言葉にできない。」との言葉があった。その言葉通り、研修が終わるころにはすっかりパラグアイが大好きになっていた。それはなぜか。私は、その答えは「人」にあると思う。研修における訪問先では、どんな場所でも人々の笑顔と優しさに囲まれていた。例えばサン・ミゲル特殊教育センターでは、朝からたくさん量の大きなパンを焼いてくれて、コーヒーと一緒にもてなしていただいた。これだけのパンを作るのに相当な労力と時間がかかっただろうと思うと、とてもありがたく感じる。お土産でいただいたパンは、残念ながら全部食べ切れなかったが、先生の思いが込められていた分、とても美味しかった。行く先々で出会った人たちの笑顔と温かさこそが、この国の一番の魅力であると思った。

● 児玉 やこ

人とのつながりや自然とのつながりを大切にしたいパラグアイの生活が、とても魅力的に感じた。家族を一番大切に思っているのはもちろん、友達や近所の人と助け合い、一緒にテレレを飲みながらゆったりと過ごす生活が当たり前になっている。また、どこに訪問しても笑顔で迎えられ、日本人とわかると知っている日本語で話しかけてくれるなど歓迎された。食事では「命をいただいている」ことを実感した。食事は庭で育てた野菜や果物を調理して作る。味付けのレモンや香辛料も、朝、庭から採ってきたものだ。家畜は大切な食糧で、肉は庭の炉で炭火焼きにする。自給自足の生活からは、命の大切さや自然と共生することの大切さについて考えさせられた。ラパーチョと呼ばれる美しい花が咲き、木に溢れた穏やかな街並が印象に残っている。電力は水力発電がほとんどで、植林をして環境を守りながらエネルギーを利用している。どの訪問地においても、女性の活躍が目立っていた。エネルギーにおいてもジェンダーの視点においても、日本が見習うべき社会があると感じた。さらに、ゆっくりとした時間の流れを体感し、幸せとは何かを考えさせられた。

● 笹ヶ瀬 菜生

出会ったパラグアイの人々はどの人もあたたかく、ユーモアたっぷりに私たちを迎えてくれた。言葉や表情で、時には素敵な食事でもてなしてくれた。日曜日の移動中、車内から2時間ほど外を見ていると、様々な家が見え、家の前には椅子を丸く並べて家族や友人とテレレを飲みながら過ごす人々の姿がたくさんあった。相手を寛容な心で受け入れ、人と人との出会いやつながりを大切にすることがとても自然なことのように見えた。人と人がしっかりとつながっていることをパラグアイで感じた。その関係性の豊かさは、安心感を生み、相手を大切にしようとする原動力になるのではないと思った。また、自然を大切に、守りながら生活している人々に出会った。「自然と共存することは、自然を大切にすること」と話してくれたその人の姿からは、自然への感謝の気持ちが溢れていた。利便性や効率、利益を求め、自然を壊す担い手とな

っていないか、無関心や無知でいたくないと感じた。パラグアイに来て、受け入れられることの喜びを感じ、人や自然を大切にすることを学んだ。

● 清水 歩美

パラグアイの文化を経験する時は「相手を知ろうとする気持ち」「受け入れる気持ち」を大切にしようと思い、日本にない習慣やおもてなしがあっても、驚かずにチャレンジしてみようとして研修に臨んだ。パラグアイ人は「テレレ」という、同じコップでお茶を回し飲みする文化をととても大切にしている。ただお茶を飲んでいるのではなく、相手の人を受け入れ、その人たちと一緒に過ごす時間を大切にしているのだ。私はこのテレレを通して、逆にパラグアイ人から「訪問国に肯定的に出会う」ことを学んだ。ホームステイ中、庭でゆっくり話をしていたときにテレレが回ってきた。正直な感想は「やったあ」だった。テレレを経験する嬉しさよりも、テレレを飲みながら家族の一員としてこの時間を一緒にすごせることに喜びを感じたのだ。この文化が、パラグアイ人の温かさやつながりを大切に思う気持ちに繋がっているのだと思う。子ども達にもこの経験と想いを伝えてみたいと思う。

● 田原 浩美

パラグアイの人々と初めて出会ったとき、シャイで控え目な様子から「日本人に似ているな～」という印象を感じた。そのような第一印象をもった私は、勝手にパラグアイと日本のあらゆる部分が似ていると想像していた。しかし、パラグアイの国家の成り立ちや現代の家族形態について知ると、パラグアイの独特な共生文化に気づき、より深く知りたいと思うようになった。現代のパラグアイでは離婚が多く、再婚を繰り返して血縁関係のない親子になっても仲良く暮らしている家庭が多い。それでも、大切なものを問われると口をそろえて「家族」と答えるのだ。スペイン領植民地の時代や戦争を経て先住民が2%、混血の国民が95%になった経緯から考えると、パラグアイの独特な共生文化は生き残りへの道であったと感じる。また、その共生文化を築けたのは、過去に、隣人愛と平等主義を説くイエズス会の布教によって育まれた信仰深さではないかと思う。信仰深さは訪問先の諸所で感じることができた。このように、国民性に焦点を当てただけでもパラグアイの複雑な歴史がみられて大変興味深い。帰国してから、パラグアイについて益々知りたくなっている。

● 村田 義剛

滞在初日、JICA 職員の竹村さんから「パラグアイに来た人はパラグアイを好きになって帰るが、その理由を上手く説明できない。」という説明を受けた。そのお話を聞いたときは「??」。しかし、10日間の滞在を通して、まさしく自分がその気持ちに当てはまる。パラグアイの「〇〇が好き!」という具体的な事例がでてこないが、いつも訪問先を後にする際、名残惜しい気分になる。訪問先の学校・施設の方々が丁寧に、かつジョークを交えて説明して下さったこと、ホームステイ先でテレレを回し飲みしながらのんびり過ごしたこと、スーパーでお土産を探しているときに日系の方がおす

すめ商品を教えてくれたこと、それらの人と人との繋がりが、パラグアイを好きになった理由であり、パラグアイの良さであるのかなと今になって感じる。途上国からのテイクオフ期に入っているパラグアイ。発展して経済的に豊かになったとしても、いつまでもこの温かい国民性は残っていてほしい。

● 油浅 重里

正直、現地を訪れるまではパラグアイという国がどんな国なのかほとんど知らなかった。しかし、その何も知らなかったということがかえってよかったのかもしれないという思いがある。様々な情報による偏った先入観をもつことなく、パラグアイという国に出会うことができたからである。そんな出会い方をしたため、パラグアイの素晴らしいところをたくさん感じることができたのだと思う。情報が溢れる現代では、正しい情報も偏った情報も簡単に耳に入ってしまい、実際にその国を訪れたり、その国の人と触れ合ったりする前に先入観やステレオタイプが形成されやすい。だからこそ、どんな国に対しても多面的な見方をすることを忘れてはいけないと思う。また、自国の文化を大切に思うのと同じように、他国の文化も尊重し、その違いを楽しむ姿勢も大切ではないかと考える。そして、いつも自分自身が他者や異文化に対して心を開き、多様性を受け入れる気持ちでいられたら、どんな国とも肯定的に出会っていくことができるのではないかと思う。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 安藤 理恵

南米だけでなく、世界中に日系人はそのコミュニティを築いてきた。パラグアイでは、そのつながりがとても強いのだと感じる。日本人は入植し、胡麻の栽培を伝えたから、現在の輸出入の関係がある。同じことがまた大豆にも当てはまるであろう。日系人や、親日的な感情を持つパラグアイだからこそ、自ら栽培する大豆を利用し、東日本大震災の際に、各地に豆腐の支援を行うことに結びついた。そしてその行動がますます日本とパラグアイの関係を友好的かつ親密なものへと導いている。そのような関係が築いてこられた一つの理由として、パラグアイ人と日本人の気質の類似があげられるのではないだろうか。パラグアイ人の持つ真面目でおとなしい性格に、パラグアイと日本の同一性を感じる。

● 市江 文奈

日本とパラグアイのつながりを話すうえで欠かせないのが、日系社会の存在である。今年は、日本人がパラグアイに最初に移住してから80周年になり、多くの記念行事が行われている。今回訪問させてもらったイグアス日本人会では、東日本大震災の時、「豆腐百万丁計画」を立案された福井さんのお話を聞くことができた。「同じ日本人として何か支援をしよう」と思い立ち、パラグアイでは家畜のエサとして作られている「大豆」を使おうと思いついた。他の地区の日系人を巻き込んで大豆を送って、日本で豆腐に加工し、東北へ届けた。その情熱と熱意に満ちた話を聞いて、地球の裏側という遠く離れた場所にも、「心はひとつ」なのだと感じた。また、いくつかの現地学校を訪問してもらい、子供たちと交流することができた。こちらの授業を心から楽しんでくれたり、技術協力の話からアニメについてなど、日本について知っていることを話してくれたり、友達を大事にしたり・・・などの姿は日本で見ている自分の生徒と変わりがなく、素直な子供たちに心癒された。

● 児玉 やこ

パラグアイ人は日本人と似ていると感じた。訪問先の生徒・児童は、笑顔で私たちを迎え、交流やインタビューには照れながらも素直に応えてくれた。将来の夢や大切なものを聞くと、周りの様子をうかがいながら書き進めたり、質問の意図を確認したりするなど、物事に真面目に慎重に向き合う姿が見られた。休み時間には、友達と遊んだり話したりして一緒に過ごす時間を大切に、授業では教え合ったり、共感し合ったりして協調性が感じられた。日系社会が存在するためか、日本食が生活に浸透している。ホームステイ先のパラグアイ人のお母さんは豆腐に醤油をかけて食べ、街中では日本語のレストランの看板も目にした。日本の企業の自動車も多く出回っている。訪問した技術訓練校では、シニア海外ボランティアの方による日本の技術の伝達に合わせて、機器や道具も日本から持ち込まれたものであるとうかがった。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方の活動から、JICAの活動が日本とパラグアイをつないで、よりよい世界の創造に一役買っていることがわかった。パラグアイで栽培されたごまの多くは日本に輸入され、日本の市場に出回っている。パラグアイで貧困撲滅を目指してごまの栽培を広めた白沢氏の思いも、日本とパラグアイをつないでいる。

● 笹ヶ瀬 菜生

地球の裏側であるパラグアイで、実際に日本人や日系人に会い、日系社会を見たときに不思議な思いであった。日本語を学び、日本文化や伝統を大切に生活している人が多くいること、想像を超える困難さに耐え、パラグアイの発展に寄与してきた日本人がいることを全く知らずにいたことに衝撃を受けた。ホームステイ先のパラグアイ人の家庭では、日本語は通じなかったが、散歩やドライブで、自分の職場や学校を案内してくれるときに日系人経営のレストランや野球コート、公園の鳥居を案内してくれた。日系社会の存在がごく当たり前で、とても自然な空気感であった。互いに認め合い共生し

ていることが伝わってきた。パラグアイにとって日本はあまりに遠い国ではなく、近い国なのだと感じた。また、子どもたちの伸び伸びとした姿や人懐っこさ、一緒に遊び交流することで心を開いてくれること、相手を思いやる気持ちや歓迎してくれるところ、教師の教職に対する使命感など、交流して初めて分かる日本とパラグアイとの同一性があった。

● 清水 歩美

事前に予想していたよりも遥かに日本とのつながりを感じた10日間であった。日本では、「パラグアイってどこ?」とおもわず聞き返してしまうことが多いが、パラグアイの人々は日本のことをよく知っていた。カルロス・アントニオ・ロベス職業訓練校では、意外にもたくさんの日本とのつながりを感じた。日本からの支援が多く、学生達の使う機械や机やイスには日本のマークが貼ってあった。多くの学生たちは、日本の印象を「テクノロジー」と答え、日本に対して憧れを抱いている学生もいた。50年近く昔に、日本から支給された部品を大切に使っているとの話も伺うことができた。この訓練校の学生たちが、自分の夢に向かって専門技術を学んでいる周りには、たくさんの「日本」があることが驚きでもあり、嬉しく感じた。こうしたパラグアイと日本のつながりを知っている日本人は少ない。パラグアイとのつながりを、日本で子ども達や周りの人に積極的に伝えていきたいと感じた。

● 田原 浩美

昨年の夏、偶然気づいたが、私は何年も前からパラグアイ産のゴマを食べている。現地の訪問先に白沢商工株式会社があったのも運命を感じた。会社の玄関には取り扱っている製品が展示されており、その中に私が食べている商品があった。日本が輸入している白ゴマのほとんどはパラグアイ産だ。でも、パラグアイではゴマを食べない。元々、小規模農家では綿花の栽培が盛んだったが、価格低下により減少…白沢社長は、「貧困撲滅!」という一心でゴマ栽培を推進したという。なぜゴマなのか…小規模農家とゴマ栽培の特徴を分析し、安定して栽培できると判断したからである。また、農家には価格低下しても保障するし、価格高騰すればそれだけ支払うという条件を付けたのだという。心から貧困撲滅を願っているからこそできた偉業だと感じる。現在、白沢商工株式会社はパラグアイを代表する立派な大企業である。日本でも貧困問題は深刻だ。パラグアイと状況は違うが、皆が平等な世界を目指していることに違いはないと思った。

● 村田 義剛

パラグアイの首都アスンシオンには、日本の自動車会社の看板が多く見られた。中にはTOKYOという名前の中国企業のメーカーもあり、日本の製品への信頼が高いことがわかった。その中でパラグアイと日本とのつながりを強く感じたのは、日本からの移住された方々との交流である。イグアス居住地では、日本から遠いパラグアイという土地に、もうひとつの日本があったのかと思わせるくらい、日本の文化が守られ、伝えられ続け、大切にされていた。しかし、私も含め、日本で生活している多くの人がこの事実を知らない。日本が震災

の被害にあって大変だった時期に、百万丁の豆腐を届けてくれた団体がパラグアイにあったことも、日系移民がパラグアイの小農家を救うためゴマ栽培に着手し、現地の人々と協力して産業を支えたことも、その多くの事実が日本に届いていない。私たち教師にはこれらの学びを伝える対象があるので、その情報を子どもたちにしっかりと伝え、違う角度から日本を見つめ直してもらいたい。

● 油浅 重里

今回の現地研修で、日本とパラグアイとのつながりを多くの場面で感じた。パラグアイには約5,800人の日系人社会がある。1936年に日本からパラグアイへの移住が開始されてから、今年で80周年を迎える。現地には日系のホテルやレストランも多く、おいしい日本食も食べることができる。また、日本語学校では日本語や日本文化の伝承が行われ、日系人社会にとって大きな役割を果たしている。人としての同一性に気づかされる場面も多々あった。今回の研修では、訪問先で出会った人たちに「大切なものは何ですか?」という共通の質問をしたが、そこで人としての共通点が見えてきた。子どもから大人まで、この質問をすると「家族」や「友人」など、人とのつながりをかけがえのないものとして挙げるが多かったのである。そんな答えの数々を聞きながら、もしかするとどの国でも同じではないだろうかという思いにかられた。やはり最後の最後に人が求めるものとは、人のぬくもりやつながりなのかもしれないと考えさせられた。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 安藤 理恵

パラグアイは今まさに、発展していく最中にある状態であるといわれている。それは、アジアで近年発展を遂げてきた多くの国々と類似していると感じた。アジア諸国は距離的な近さもあり、私たちはその影響を直に感じてくることができた。しかし、日本にとって、地球の全く裏側に位置するパラグアイの現状はまず知ることすら難しい。その中で、我々が共通の課題を持って共に考え、共に超えるということは、なかなかイメージしにくいものである。我々が教師として生徒にこの観点で何か学べるがあるとすれば、やはりそれは今回のような研修に自ら参加することであろう。実際に、

パラグアイで起きている問題は、我々もまた戦後に経験したものである場合も多く、今まで日本が培ってきたスキルを利用して解決できるものもあるだろう。今後は今までにない新たな方法論を構築しながら、パラグアイの今に寄り添った支援を行っていくことが重要であるといえる。

● 市江 文奈

環境保全に関しては共通の課題であると感じた。イグアス湖周辺の環境を守って、安定した電力を供給できるような体制を作るプロジェクトが JICA の技術協力のもと実施されている。パラグアイの電力会社に働きかけて、湖周辺の農家に今ある環境を守ることが長期的にみて必要だということを経道に伝え、植林活動を行っている。モデル農家のシシリアさんが言っていた「どうしたら自然を守れるか。」を私たちも考え、行動できるようになりたい。また、伝統民芸の後継者不足問題は、日本にも存在する。「ニヤンドゥティ」は「蜘蛛の糸」という意味で、細くてカラフルな糸を麻などの布に縫い付け模様を作り、完成したら台紙から取り外す。大きいもので2か月はかかる。すべて手作業で時間と労力がかかる作品である。ただ市場価格はほとんどが糸代で、収入にはならない。職人たちは個人で製作しており、全体を管轄する組織は収入面までをカバーできず、後継者が不足している。日本も守るべき伝統芸能・民芸品は多くある。それぞれのアイデンティティを守るための取り組みが必要だと思った。

● 児玉 やこ

パラグアイの人は、家族・地域・自然・様々なものと共生している。障がいをもつ人がいても、誰かがサポートして生活が成り立つ社会であると感じた。しかし、ハード面が整っていないため、一人で出歩き、自分の力で生きていくのは難しい。一方、日本は施設のバリアフリー化が進み、教育も充実している。しかし、皆で支え合う共生の意識はパラグアイを見習わなければならないと感じた。最終日、車窓から見たスラム街は、ごみにあふれ、水はけの悪い道は水たまりがそこら中にある不衛生な街だった。日本にも、貧困問題がある。貧困撲滅は世界共通課題であり、SDGsにあるように誰一人取り残してはいけない。そのためには、日本でもパラグアイでも、世界を視野に入れた教育や取組が必要になる。幸せの形は、国によって人によってそれぞれだが、地球人全ての幸せを守るために私たちができることを子どもたちと考えていく必要がある。そのために必要なのは「夢」と「絆」であると学んだ。青年海外協力隊の方は、世界を変える力があると信じて、大きな「夢」をもって活動されている。その「夢」は、一人では叶えられない。たくさんの人との「絆」が不可欠だ。「夢」と「絆」を手に、世界に羽ばたく生徒を育てたい。

● 笹ヶ瀬 菜生

パラグアイに来て感じたテレレを飲む豊かな時間や、人や自然とつながって生きる共生文化。日本の安全性や親切な人柄、豊かな自然や食文化の多様さなど、それぞれの国に良さがあり、未来に残したいものがある。一方で、スラム街、進学を諦める子ども、片親家庭、貧困の連鎖などの課題もある。

失ってからでは遅いその国の良さを大切にしながら、多くの人が幸せを感じて生活できるような発展を模索することが求められていると分かった。パラグアイでは、豊富な水資源を今後も持続可能にするためのイグアス湖流域総合プロジェクトが行われている。日本でも、自然環境を守る取り組みをしている人はいる。しかし、それらの活動に関わる人だけが懸命に考えて活動するだけでは改善は難しい。一人一人が、自然と共生することの大切さに気付き、今より少しの不便さを受け入れる努力が必要なのではないかと思った。簡単に答えが出る問題ではないが、世界の国々の経験に学んだり、みんなで協力したりすること、自分の国だけに目を向けずに視野を広げることが大切だと感じた。そして、子どもたちと共に考えていく教育の担う役割の大きさを感じた。

● 清水 歩美

私は小規模ゴマ栽培農家支援優良種子生産強化プロジェクトと白沢商工株式会社の訪問から、「共通の課題について共に考え・共に越える」ことを学んだ。ゴマの生産という現在の形に至るまでに小規模農家の貧困を共に考え、小規模農家にできることを模索したと聞き、感銘を受けた。大規模農家に真似をされると負けてしまうことを想定し、機械ではなく手作業が合っているゴマに着目したと話す白沢社長の言葉を聞いて、ふと自分の教えている子どもたちの顔が思い浮かんだ。目標を教師で定めてしまい、子ども達をそれに近づけようとしてしまうところが自分にはあった。だが、目の前にいる子の良さを引き出し、彼らの目線に立ててできることを考えなければいけない。すぐに結果が出るものではないことを理解し、将来を見据えた的確な支援を行うことが教育にとって大切なのだということを改めて気づかせてもらった。パラグアイの人々を救おうと懸命に考え、それを行動に移した白沢社長たちのように、私も目の前の子ども達と共に考え、共に越える教師を目指したい。

● 田原 浩美

研修最終日、最貧困カテウラ地区を訪れた。首都からほど近い街にそのスラム街はある。立派な大統領官邸を背景にして広がるスラムの光景は、あまりにも周囲とのギャップがあり過ぎて息を呑んだ。道には汚水が溢れ、家の窓は全て割れてなくなっているし、廃材で作られた家もある。大きな石が積み上げられたりゴミが散乱したりしている道を、学校の制服と思われる揃いのシャツを着た子ども達がリュックを背負って歩いている。スラム街に住む人々の生活について聞くと、さらにやるせない気持ちになった。スラムを撤去する方針で建てられた公営住宅に移住することを勧められても、それを拒否して住み続ける人も多いそうだ。多くの人は、補助金が入るとテレビなどの家電や趣向品に遣ってしまうし、補助を受けることが当然のようになってきているという。これを聞いて、私は日本の生活保護制度の課題を思い出した。もちろん多くの人は真面目に生活しているが、一部そうでないことも事実である。その中には、知的障害などにより誤ったお金の使い方をしてしまい、生活保護制度によって守られるはずの最低限の衣食住が成り立っていない家庭がある。障害、知識不足、

生活力不足…どここの貧困問題にも共通する課題であると感じた。

● 村田 義剛

様々な国から支援を受け、今、経済発展を遂げようとしているパラグアイ。その支援を、パラグアイが自分たちで維持、発展を続けなければならない。研修では職業訓練校で、日本の企業から援助された施設・備品を用いて技術を学んでいる学生と出会った。きっと、これからのパラグアイを支えてくれる若者達になるに違いない。日本も戦後、多くの国からの支援を受け、発展を遂げて今がある。その恩返しとしてJICAは世界の国々への支援を行っている。パラグアイと日本は地理的にも、文化的にも異なる点が多くあるとは思いますが、日本のこれまでの歩みはパラグアイのこれからの成長にとって参考となると考える。また、ニヤンドゥティ工房では、パラグアイの伝統工芸品の繊細さだけでなく、完成までの労力も知り、商品として売られている値段の安さに驚いた。伝統工芸品を数多く生産している日本のビジネスモデルも、きっとパラグアイの経済を支えるものとなるであろう。そのモデルとして、日本は今後10年、20年後はどのように発展していく必要があるのかを考えるきっかけとなった。

● 油浅 重里

今回の研修では、パラグアイの学校も数多く訪問させて頂いた。現地の先生方と意見交換をする中で、パラグアイと日本との共通の課題が見えてきた。それは、家庭教育力についてである。子どもの発達を考える上で、家庭教育は学校教育と共に大変重要な役割を担っていると考える。子どもが家庭や学校で安心して過ごし、そのままの自分を認めることができこそ、周りの人に思いを馳せることができるのではないだろうか。持続可能な社会を目指し、様々なグローバル 이슈に向き合おうとする時、自尊感情の高い子どもを育てていくことは大変重要である。それぞれの子どもの家庭環境は様々であるが、学校と連携することで、家庭教育力の底上げができれば、毎日を満たされた気持ちで過ごせる子どもが1人でも多くなり、様々な価値観を認め、周りの人に思いやりをもって接することのできる、自尊感情の高い子どもが育つのではないだろうか。パラグアイでの経験は、そのために教師としての自分に何ができるのかを改めて考えるきっかけを与えてくれた。

● ハンズオン教材「パラグアイBOX」

◇ 手にとって感じることでできるパラグアイならではのものを集めた「パラグアイ BOX」を共同で作成した。このBOXには、現地での使用方法を撮影した写真も入れた。

※100GS=約2円

No.	タイトル	説明	数量	価格※ (Gs)	説明写真
1	ニヤンドゥティ	パラグアイの伝統的なレース編み。よく見られるデザインの円型およびそれをつなぎ合わせたものと、国旗を象ったもの。ニヤンドゥティとは、グアラニー語で「蜘蛛の巣」という意味。	3枚	180,000	⑫⑬
2	衣装(女)	“ニヤンドゥティ”で飾られた女性用トップス。イタウグア市ニヤンドゥティ販売店で購入。	1着	300,000	⑫⑬
3	テレセット	テレとは、冷水でいれるマテ茶で、パラグアイ人には欠かせない飲物。体調などに合わせて薬草をブレンドし、専用のコップとストローで飲む。親しい人と回し飲みをするのが伝統的かつ日常的な飲み方。	1式	225,000	⑥⑧
4	マテ茶	主に南米アルゼンチン、ブラジル、パラグアイで生産されている飲料。パラグアイのグアラニー族が、活力を与える不思議な木として飲用を始めたことが起源とされる。	1袋	12,600	⑥
5	チバの粉	パラグアイで広く食べられているパンのようなスナック。スーパー、道端などいたる所で売って行く庶民的な食べ物。小麦粉でなくキャッサバ(マンジョーカ)イモの粉。	1袋	3,900	⑦
6	お菓子レシピ本	「PANADEROS(パン)」、「REPOSTEROS(ケーキ)」お菓子のレシピ本。(スペイン語)	2冊	—	
7	お砂糖の袋	ECO AGROは、主に小農の方が生産した、オーガニック食品を扱う組織。2001年に設立。Azucal Organica Morenaはオーガニック黒砂糖。	1袋	—	
8	うちわ	植物を編んで作られるうちわ。伝統的な手工芸品。	2本	—	
9	パラグアイ国旗	アスンシオン市の小店で購入したパラグアイの国旗(布製)	1枚	40,000	
10	パラグアイ地図	パラグアイ全図(1/2,000,000スケール)	1枚	—	
11	グアラニー語辞書と詩集	パラグアイの母語であるグアラニー語とスペイン語の翻訳のための辞書、およびグアラニー語で書かれた詩集。	2冊	400,000	
12	教科書	小学校1年算数、中学校2年の地理・歴史の教科書。(スペイン語)	2冊	158,000	
13	新聞紙	スポーツ庁訓練センターでいただいたパラグアイのスポーツ紙。	3紙	—	
14	ポストカード	デザインは、「アスンシオン」「ラバーチョ(花)」「テレレ」「チバとニヤンドゥティ等」「パラグアイ地図」	5枚	30,000	
15	パラグアイ観光リーフレット	パラグアイ全体の観光案内(日本語版)とパラグアイ南部の観光案内(英語版)	2冊	—	
16	イグアス日本人会リーフレット	イグアス移住地における社団法人イグアス日本人会の活動を紹介するリーフレット。	1冊	—	④
17	イグアス日本語学校資料	イグアス日本語学校の2016年度学校案内、文集「はばたき」第30号2015年度。	2冊	—	③
18	世界地図	パラグアイで作られている世界地図。	1枚	15,000	
19	紙幣・硬貨	紙幣…20,000グアラニー1枚、10,000グアラニー2枚、2,000グアラニー4枚、硬貨…500グアラニー1枚、100グアラニー2枚。	10枚	48,700	
20	解説カード	パラグアイBOXの解説カード	18枚	—	
21	写真集1	パラグアイを表す20枚の写真集	20枚	—	
22	写真集2	受講者が用意したパラグアイの写真(B4ラミネート4枚、A4写真プリント5枚)	9枚	—	

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

<現地研修の報告>

- ◇ 同行ファシリテーターの挨拶の後、パラグアイチームが ①パラグアイ基本情報、②日系人社会、③エネルギー（水力発電）、④イグアス湖流域総合管理体制強カプロジェクトとモデル農家、⑤日本人の活躍、⑥政策と国民の実態について、現地の写真とパラグアイの文化「テレレ」の実践とともに紹介し、研修を通しての感想と、一番印象に残っている写真1枚を1人ずつ発表した。

● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2017での報告

<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラムに参加した人たちに、56分間（14分×4セッション）報告を行った。



<分科会ワークショップ>

- ◇ 現地での発見、気づき、学びを基に、参加者に伝えたいことや共に考えたいことをテーマにワークショップ・プログラムを作り、分科会にて提供した。

タイトル「誰だって世界と関われる！」

テーマ：開発支援・国際協力

ねらい：パラグアイの現状や課題を知り、自分たちが地球市民としてできることがあることに気づく



<教師海外研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーターによるチーム紹介後、次の流れで海外研修報告を行った。
- ① パラグアイの場所等、基本情報を紹介
 - ② 現地訪問先の様子やホームステイ体験をクイズ形式で紹介した後、問題ごとに解説
 - ③ 現地研修で一番印象に残っている写真を、エピソードと共に1人ずつ紹介
- ◇ 会場内に「パラグアイ展示コーナー」を設け、生活用品や現地の学校で使われている教科書などの紹介を行った。

